五十嵐青息 一班隻)

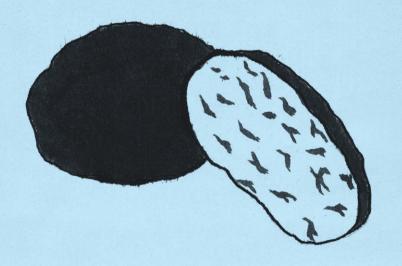
ICAR ACHI Vanali (Ilminatani)

合口ら耳

五十嵐靖晃 海渡り

IGARASHI Yasuaki

"Umiwatari"



津奈木町のアートによる町づくりは、水俣病からの地域再生と文化的空間の創造を目的として1984年に始まりました。アーティストの五十嵐靖晃を招聘し、津奈木町を構成する人、物、歴史、文化などさまざまな要素をアートでつなぎ、地域に根ざした新たな文化的活動を生み出そうと2018年に始まったのがアートプロジェクト「つなぎまちのつなぎかた」です。五十嵐は、3年間にわたるフィールドワークを経て、海沿いの集落に密やかに伝わる「弁天様のお祭り」を人々との協働によって持続可能な現代アート作品として再構築した《海渡り》を2021年秋に生み出しました。「弁天様のお祭り」は、潮の満ち引きと関係のある旧暦によって執り行われるため、年によって《海渡り》の日程も変わります。3年目となる今年は、つなぎ美術館のインターンシップに参加していた大学生など大勢の若者たちの参加もあり、これまで以上に熱のこもった糸張りとなりました。また、昨年は天候がすぐれず中止となった競舟の乗船体験も今年は町内外からの参加者で賑わいました。民間信仰にアートが接続して生まれた《海渡り》は、歴史と伝統を大切にしながらもアーティストと人々の協働によって地域とともに変化しながら後世へ受け継がれてゆきます。

つなぎ美術館(津奈木町)

# 令和5年《海渡り》スケジュール

① 海渡りの日	9月30日(土) 9:30~17:00
《海渡り》作品公開	10月1日(日)~10月27日(金)
② 組紐ワークショップ	10月26日(木) 9:00~15:00
<ul><li>③ 糸あげの日</li></ul>	10月28日(土) 12:00~16:00
④ 弁天様のお祭り	11月9日(木)*旧曆9月26日 10:00~13:00

会場 旧赤崎小学校付近(熊本県葦北郡津奈木町福浜165番地)







#### 2023年9月30日(祝) 9:30~17:00

午前の部は昨年、悪天候によって断念した競舟の乗船体験を開催。競舟チー ム「津奈木海龍」のレクチャーを受けた参加者は舟に乗り込むと、カーン、カーンと いう鐘の音に合わせて櫂を漕ぎ、弁天島の沖にある黒島を周って、ゆっくりと陸へ 戻りました。昼食を食べ、潮が引くと、午後の部の糸張りが始まりました。今年から 「渡り」「引き」「結び陸」「結び島」「世話役」の役職を設け、制作に参加した人 たちの氏名を木札に書いて掲示しました。町内外から集まった参加者は協力し合 いながら、102本の糸を1人1本ずつ丁寧に繋ぎました。

# 「外からでも参加できる」

<sup>ゆうや</sup> 森永 **湧也**さん 熊本大学 自然科学教育部 土木建築学専攻

私は大学院での研究の中で町の取り組みや《海渡り》を知って初めて参加しました。地域の文化 と強く結びついている《海渡り》に外から参加させてもらうことに少し不安もありました。しかし、競 舟に乗せてもらったり、糸を渡すために何度も島と陸を往復する中で、自然と地域の方々との会話 が生まれ、これまでの《海渡り》のことや地元のことなどを教えてもらいました。最後の一本の糸が張 り終わった時には、周りの参加者と一緒に達成感を共有することができ嬉しかったです。







#### 2023年10月26日(木) 9:00~15:00

今年は津奈木小学校と連携した地域学習に向けて、つなぎ文化センターに《海渡り》の公開制作会場が設けられ、小学生と保護者が協力して準備を進めました。技術が上達した児童は《海渡り》に使用する100メートルの組紐にも挑戦し、約10メートルまで組みあげました。地域学習では3年生、約30人がグループに分かれ、組紐ワークショップ、風景スケッチ、作品鑑賞をします。事前に組紐の体験をしていた児童も多く、教え合いながらブレスレットほどの長さに組みあげました。最後に、みんなの描いた《海渡り》の絵を鑑賞して、それぞれが好きな絵を選びました。

# たかき ゆうき 高木 悠生さん 小学生

たくさんの糸を順番に動かすと一本の紐ができていくところが面白かったです。 磯遊びの時、ウメボシイソギンチャクをつつくと水が出てきたり、石をひっくり返すと魚やヤドカリがいて、動きが早くてなかなか捕まえられなかったけど、みんなで協力して捕まえられて楽しかったです。

### 髙木 美穂さん 悠生さんのお母さん

弁天様と向かい合うように座って一生懸命に組紐を組む姿や、波の音と組紐を組むカランカランという木の音、磯のあちこちからあがる子供達の歓声に、微笑ましい和やかな時間を過ごしました。息子は100メートルの組紐にも参加し、自分の組んだ数センチを嬉しそうに語っていました。「この組紐が弁天様と繋がるのが楽しみだね」と親子で話しています。



08





#### 2023年10月28日(日) 12:00~16:00

海渡りの日から約1か月間の展示を終えた糸を島と陸の間を何度も往復しながら丁寧に巻きあげていきます。すべての糸を巻きあげると鳥居を設置し、元の姿に戻しました。掲示されていた参加者の名前が書かれた木札は作品と同じ糸が結ばれ、本人へ渡されました。この木札は来年も使用することができます。木札を受け取ることができなかった人には、参加者が海渡りの日の記憶を振り返りながら、手分けして届けました。

#### 「名前が残ると記憶が思い出される」

#### たじま のぶひろ 田嶋 伸浩さん 日当区長

令和5年から区長を務めたことで、プロジェクトの推進メンバーとして関わるようになり初めて参加しました。《海渡り》のことは、最初に作品制作が行われた令和3年に娘と孫が参加して楽しそうに話していたので興味を持っていました。糸あげの日は、みんなで作りあげた作品が元に戻っていくことに少し寂しい気持ちもありましたが、鳥居が立てられると風景が引き締まる感じがしました。自分の名前が書かれた木札を手にすると、《海渡り》の記憶が思い出されて、また来年も行きたいと思いました。



























11

ひろすのきろく

2023年6月29日(木) 赤崎漁村センター 昨年から弁天様のお祭りの直会の料理に、津奈木の郷土料理「ひろす」が新しく加わりました。豆腐とひじき、ごぼうを練って油で揚げた料理です。この日は赤崎地域の岩崎美津子さん、千々岩尚子さんに、「ひろす」を作る工程や、津奈木町との関わりについてお話を伺い、写真と映像で記録しました。詳細は今年度の《海渡り》タブロイドの「ひろすのふたり」というコーナーで紹介しています。

津奈木で生まれ育った人だけではなく、他の土地から移住された人たちにも 受け継がれている「ひろす」づくり。津奈木町の外から訪れるアーティストや参 加者が、土地の文化の伝承者になれるという《海渡り》と同様の可能性を感じ た取材でした(三迫)。

10



### 2023年11月9日(木)\*旧暦9月26日 10:00~13:00

「つなぎまちのつなぎかた」が始まり、弁天様のお祭りを多くの人と共有するようになって5回目となる今年は、これまでお祭りを続けてきた松田テル子さんから神鷹由美さん(松田テル子さんの娘)が引き継ぎ、祠を綺麗にして料理や果物、亀萬酒造の御神酒をお供えして御祈願を行いました。直会では、赤崎に伝わる郷土料理「ひろす」や煮しめ、地元の果物を使ったデザートなどが振る舞われ、参加者は舌鼓を打っていました。今年は大学生のインターンをはじめ町外から多くの参加があり、様々な地域の話に花が咲き、人々の交流も深まりました。

## 「お祭りの原点を見た」

井原 功介さん 太宰府からの参加者

五十嵐さんのアートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」以来、弁天島の景観がなんとも好きになり、時折、海と島と空を眺めながらお弁当を食べたり、癒されていた私。今回、《海渡り》で弁天様が祀られていることを知り、信仰の継承とお祭りの原点を見たようで感動しました。地元の方々の懐の深さと温かさが弁天様と重なります。手作りの郷土料理に昔話が加わり、集われた皆様とこの上ない時間を過ごすことができました。また来年も絶対参加しようと思います。









直会の料理には昔から祭事にかかせない赤飯と煮しめ、赤崎地域の郷土料理「ひろす」も入っている。近年では、から揚げや刺身などのメニューも増え、昔と比べ食べやすくなっているという。季節の果物や野菜を使い、彩りよく盛り付けることも大切にしている。

もそも自分の内面から湧き出る私的なモノローグであり、「以下、云々……。

五十嵐靖晃《海渡り》が生まれた出発点には、かつて地域で執り行われていた弁天様のお祭りを過疎化以降、松田テル子さんが一人で続けているという話があったという。この話に始めて触れたときの五十嵐の興奮ぶりは記録集からもよく伝わってくる。そのテル子氏の思いはどこから来るかというと「神様とかものすごく大事にして」いたお父様に由来しており4、そしてまたそうしたテル子氏のことを娘も「尊敬」しているという5。

《海渡り》プロジェクトはテル子氏の「私」と五十嵐の「私」とが強く共鳴しあうことで本格的に動きはじめた。アートの現場ではこのような化学反応が良く起こる。「公」の精神あふれる「私」と「私」のスパーク。そこで起こっているのは「公」と「私」のスパークではないように思う。

事業や組織の継続性・持続可能性が議論されるとき、その成功要因を「属人的」な働きに 求めることはしばしば良くないこととされる。よく整った仕組みや制度が準備された上で誰が やっても無難にうまく回せる事業や組織、つまり「標準的」であることが一般のビジネスにおい て求められるのは理解できる。が、私はいつも不思議に思う。アートプロジェクトが「属人化」か ら離れ「標準化」を目指す意味はあるだろうか。アートの生まれいずるところを「属人」以外に 求めるとすれば、それをアートと呼ぶ意味はあるだろうか。

「公」を忘れた公人・役人、「私」を忘れた表現者・住民、による標準的かつ顔の見えないプロジェクト。対して、「公」の精神に溢れた「私」による属人的かつ顔の見えるプロジェクト。とちらが地域に必要なのかは明らかだろう。

十年・百年・千年後に向けて捧げられる真摯な祈りが形を変えながら受け継がれていく。

# 海を渡り"まなざし"を渡す舞台

五十嵐靖晃

今年で3回目となった《海渡り》。津奈木に行くと、毎年、特産品である蜜柑の出来について、豊作不作、味の良し悪しの話題があがる。要因はその年の天候にある。蜜柑に当たり年はずれ年があるように、天候の影響が大きい《海渡り》にも、とうやらそれがあるようだ。ちなみに《海渡り》としては、今年は当たり年。1回目が最高で、昨年2回目が天候に苦しんだので、表→裏→表といった法則で考えると1年ごとに当たりが来ることになるが、まだ3回目、これから永く続けて行く中で観察していきたい。それは潮の満ち引きであり、月や地球や太陽の関係の観察でもある。それらの法則を変えることはできないが、心の準備はできる。自然法則と向き合うと、そこには常に発見と感動がある。津奈木には農業や漁業を通じて、暮らしの中にその"まなざし"を持った人たちがたくさんいる。《海渡り》を通じて、未来に伝えたいのは"津奈木らしいまなざし"である。

"まなざし"の話で言えば、去年は荒天のため中止となった、江戸時代末期から続く津奈木の海文化"競舟"の乗船体験が今年やっと実現した。海に座っているようなあの感覚はやはり特別な体験。当日「競舟にとうしても乗りたいから来た」という地元の子とももいて嬉しくなった。漕ぐのも楽しいし、海面を滑るように進む競舟を見ているだけでも気持ちが良い。そして、陸を離れ、海から自分たちの暮らしを見つめなおす。普段とは逆の"海から陸を見る視点"へと切り替える。それは《海彼り》の考えと深く重なる。そしてまた、午前中に競舟で渡った海が、午後には潮が引いて、今度はそこを歩いて渡るというのは、たった3時間の中に不知火海の変化のダイナミズムを感じられる最高の機会であった。

こうして"海渡りの日"は午前中に競舟の乗船体験、午後に 糸張りという1日を約200人の参加者と過ごした。そこに今年 新たに加わった要素としては"名札"。102本の赤い糸、1本 1本を1人1人が海を渡って弁天島に持っていき、島と陸をつなぐ。1番から102番まで、海を渡った人の名前がその場で木 札に書かれ並んだ。島に渡って結び手に糸を渡す時には、自 らの出身地と名前と一言を唱えた。一言は、結び手へのエー ルであったり、弁天様への願い事であったり。ここもまた、それ ぞれの思いが声になることで大いに盛り上がった。名札の登 場で1本1本の糸に1人1人の存在や思いを感じることができる新しい形が出来上がった。ずらりと並んだ名前を見て、より 人の顔が浮かぶ作品となった。その後"糸あげの日"に自らの 名札を回収しに来たり、知人や友人に届けたり、遠方の方に 送ったりするといった、つながりを大切にする良い流れも自然 と生じ、継続していきたい楽しみがまた1つ増えた。

そして今年強く印象に残ったのが大学生たちの存在。つな ぎ美術館のインターンシップ制度を利用して佐賀大学、能本 大学、京都大学から、計10名程度の学生が参加してくれた。 みんなアートプロジェクトや町づくりや地域コミュニティといった ところに関心を持っており、現地に滞在しながら積極的に関 わってくれた。何より津奈木の方々と交流しながら楽しんでい る姿はとても好印象だった。ちょうと現地に少ない世代でもあ り、彼ら若い風は、年輩の方々をはじめ、現場そのものに活気 を生み出していた。「めっちゃ、楽しかったです!」「そうか!絶 対また来いよ!」「はい!絶対また来ます!」やはり人の心を動 かすのは人。中には"海渡りの日""糸あげの日""弁天様のお 祭り"全日程に参加した学生もいた。いいアートプロジェクトと いうのは人が育つ現場になる。この流れも続けていきたい。

また今年新たに会期前からスタートした、つなぎ文化センターでの長さ100メートル(陸から弁天島までの距離)を目指す組紐づくりワークショップ。小中学生の下校コースということもあり、行列予約ができるほと盛況となった。さらに記録映像の上映や記録集の設置も行なったため、この場で《海渡り》に出会い関心を持つ人も現れ、情報の発信ブースとしても機能していた。この場の切り盛りをして良い雰囲気づくりをしてくださったお母さんたちは流石である。津奈木の未来そのものである子供たちが"津奈木らしいまなざし"に出会い、津奈木をより好きになるきっかけに《海渡り》がなっていってほしい。

度り》の考えと深く重なる。そしてまた、午前中に競舟で渡った 海が、午後には潮が引いて、今度はそこを歩いて渡るというの は、たった3時間の中に不知火海の変化のダイナミズムを感 に6れる最高の機会であった。 に6れる最高の機会であった。 こうして"海渡りの日"は午前中に競舟の乗船体験、午後に 条張りという1日を約200人の参加者と過ごした。そこに今年 所たに加わった要素としては"名札"。102本の赤い糸、1本 本を1人1人が海を渡って弁天島に持っていき、島と陸をつ は、1番から102番まで、海を渡った人の名前がその場で木

こうして今年を振り返ると、競舟、名札、大学生、組紐、ひろす、そんなキーワードが浮かんでくる。あとはみんなの笑顔。笑顔に限らず真剣な表情含め、ほんといい顔をしている瞬間が多かった。「あの場にまた行きたい」「またみんなに会いたい」と自分も素直に思う。まだたった3回目ではあるが、3回目にして、関わった多くの人にとって、また戻ってきたい場所へと《海渡り》は確実に成長しているという実感がある。年に一度、旧暦の9月26日を節目とし、赤い糸を持って海を渡り、鳥と陸をつなぐ《海渡り》。それは、土地や世代を超え、人から人へ"津奈木のまなざし"を渡す舞台になりつつある。

<sup>&</sup>lt;sup>1</sup> 花田伸一「「私」からはじまるアート/まちづくり」、九州大学ソーシャルアートラボ編『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』 水曜社、2018年、216-220頁。

<sup>2</sup> 楠本智郎「過疎地域におけるアートプロジェクトの現場から」、前掲書、204-209頁。

 $<sup>^3</sup>$ 『五十嵐靖晃 海渡り』津奈木町・つなぎ美術館、2022年、25頁・106-107頁。

<sup>4</sup> 同上、116頁。

<sup>5</sup> 同上、118頁。

I CATALOTTI TASHANI CHAWAN

プロジェクト名: つなぎまちのつなぎかた

作品名:海渡り

期間:2018年4月~

主催:津奈木町、つなぎ美術館

企画・構成: 楠本智郎(つなぎ美術館)、濱田真大(津奈木町役場)

#### 記録集

編集:楠本智郎、濱田真大、三迫太郎

執筆:花田伸一、五十嵐靖晃、楠本智郎、濱田真大

デザイン、写真:三迫太郎、五十嵐靖晃

ドローイング:五十嵐靖晃

発行:津奈木町、つなぎ美術館

2024年3月 初版第1刷発行

